

擬音語・擬態語辞典

天沼 寧 編

きよとん きっかり ぐっすり けろっ
んなり こちょこちょ ざぶざぶ ざんぷ
こ しっぽり すべすべ せかせか そそ
さ たっぷり ちょこまか つるん てき
き どやどや どんびしゃり なよなよ
たり ぬらりくらり ねっちり のほほん
ぱちっ びっしょり ふかふか ぺたん
ちゃぽちゃ ほんのり まごまご まじま

東京堂出版

編者略歴

大正3年に、奈良県で生まれた。早稲田大学文学部を卒業。文部省図書局国語課、後に、文化庁文化部国語課にあって、国語の改善・国語の表記・ローマ字に関する事柄の調査や業務に従事し、現在、大妻女子大学文学部教授。編著書に、『新修 用字用語辞典』（集英社：共編）、『国語国字問題小史』（非売品）、『ことば と うた と ものがたり』（日黒書店：共著）などがある。

現住所 東京都杉並区南荻窪 1-13-12

擬音語・擬態語辞典

定価は帯または箱に表示してあります

昭和49年12月10日 初版印刷

昭和49年12月25日 初版発行

編 者	あま 天	ぬま 沼	やすし 寧
発 行 者	岩	出	貞 夫
印 刷 所	凸版印刷株式会社		
製 本 所	渡辺製本株式会社		

発 行 所 株式会社 東京堂 出版

東京都千代田区神田錦町 3-5〔〒101〕

電話 東京 291-8226 振替 東京 270

よしなしごと

昔、昔、大昔というほどのことでは、もちろん、ないが、ともかく、かなり以前のことである。私が中学校の何年生だったかのことである。習った英語のリーダーの中に、汽車の旅だか、駅の光景だかを主題とした文があった。その文の書き出しは、「Puff puff, pant, puff puff.」というような文であったと記憶する。この後に続く文は、どんな文であったか、ほとんど覚えていないが、なんでも、それは、ロンドンの駅を出発する直前の光景を写した文であったと思う。

この「パフ　パフ、バント、パフ　パフ」というのを、日本語では「シュッシュッ　ポッポ」というのだということを習って、随分、不思議な気がしたものである。

この汽車は、もちろん、蒸気機関車——現代風に、私のあまり好まない言葉で言えば「SL」——に牽引される列車であって、汽車の走る時の音は、どうしても「シュッシュッ　ポッポ」であり、だれもが、そう言うようだし、また、そう書いてある。もしかすると、イギリスの機関車は、日本のよりも、大きく、強力で、その音は、あるいは、「パフ　パフ・・・」というように聞こえるのかしら、と思ったりしたものである。もっとも、こんなことは、ほんの二、三日のことで、後はすっかり忘れてしまい、全く思い出すこともなかった。

ところが、それから、数十年を経たある夏、私は北海道を旅行した。用事を済ませた後は、のんびりした旅だったので、物好きにも、できるだけ、各駅停車の、蒸気機関車が引っぱって走る列車に乗って道内を回ることにした。

何本か乗ったそのような列車の中に、何と驚くことには、急行列車の通過を待避して、約1時間近く、山間の寒駅に停車する列車があった。客車を10両ぐらいつないでいるのだが、乗客は、ほんの数名である。東京に居たのでは、全く想像もつかないようなことである。

こちらで退屈だから、プラットホームに降りて、ぶらぶらしたり、機

関車のそばへ行って、子供のようにながめたりして時を過ごしていた。機関車は、時々、蒸気を噴き出したり、吐き出したりしている。山懷にこだまする、その音を聞いているうちに、どういう訳だか、数十年前の「バフ バフ、パント、バフ バフ」が、ぱっと脳裏に浮かび上がってきた。そして、実に、不思議なことは、その音は、まさしく、「バフ バフ」と聞こえ、「パント、バフ バフ」というように聞こえたのである。

擬音語とは、あるいは、こんなものかも知れない。こんなことがきっかけになって、北海道から帰ってから、特に、目的があった訳ではないが、なんということなしに、擬音語、ついでに、擬態語の収集を始めた。といっても、それは、非組織的・非科学的であり、いわば、おもしろ半分というようなことであった。

それが、また、どういう訳だか、不思議な巡り合わせで、このような形でまとまり、活字になることになった。辞典と名付けるのは、少々おこがましいような内容であるかも知れないが、不備・不満な点は、今後とも、折を見ては、整備・補充していきたいと思っている。

なお、この辞典の原稿を執筆している最中に、当用漢字音訓表と送り仮名の付け方が改定となり、新たに「当用漢字音訓表」、及び、「送り仮名の付け方」として、内閣告示が出た。そこで、この辞典では、新聞等から採集した用例以外は、新しく告示となった音訓表を目安として、言みに用いてみたが、その「前書き」の趣旨に従って運用に際して、適宜に考慮してある。また、送り仮名は、告示の送り仮名の付け方の、主として、本則・例外をよりどころに用いた積もりである。しかし、いろいろの事情で、不統一な点が、なお、残っている。

昭和49年 体育の日

南荻窪の自宅で 編者

擬音語・擬態語について

はじめに

われわれは、日常の会話で、話で、また、文・文章で、それほど深く意識せずに、いわば、知らず知らずのうちに、あるいは、意識して、いわゆる擬音語・擬態語を使っている。話題・内容によって、時と場合によって、また、人によって、その使い方に、多い少ないの差はあっても、何かの音や状態・状況・有様、様子などについて話したり、書いたりする場合には、しばしば使われるのがむしろ普通である。もちろん、話題や取り扱う内容によっては、ほとんど現れない場合もあり、一つも使われないこともある。

擬音語・擬態語の使用の最もはなはだしいものの一つに漫画がある。その漫画も、戦前のものよりは、戦後の、はやりに乗ったいわゆる「マンガ」においてであって、そこには、極めて多くの、大げさにいえば数限りもないほど、多くの擬音語・擬態語が、はなはだ効果的に使われており、なかには漫画のこまの中に、擬音語・擬態語以外、何も言葉が書いてないものも多く見られる。

また、これら漫画に現れる擬音語・擬態語は、一般の国語辞典に採録されていないことはいうまでもなく、日常会話にも使われることがないようなものも非常に多い。いわば、その漫画の作者の創作であるようなものが数多く見られるのである。

したがって、漫画に現れる擬音語・擬態語の中の多くは、あるいは、幾つかは、読み手にとって、初めて接するものであり、読み手としては、使用語彙でないことはもちろんのこと、時には、それだけでは、理解語彙でもないことすらある場合もある。ところが、これが、小学校の児童にも、たやすく理解できるのは、そこに描かれている絵によることはいうまでもないであろうが、また、一面、擬音語・擬態語の持つ性質にもよるものであらうと思われる。

以上のことについて、寿岳章子氏は、「まんが」を男の子向きものと、女の子向きのものとに分け、次のように述べている。

地の文にはかなり特異な問題がある。まず、男まんがと女まんがとでは、相当品詞比率が違うということ。特に男まんがをみると、その品詞比率の示すところは、よほどかわった文が、あるということである。女まんがの方は、やはり談話語の比率に近いのであるが、男の方はよっぽど奇妙な、不思議な文でできていることになる。即ち、副詞と感動詞が全体の八割をも占めているのである。その副詞もあたりまえの副詞でなく、擬声・擬態語であって、事件、場面を音で描写するという立場のものが非常に多い。ボールが当たって、審判がひっくりかえった絵があり、そばにトンコロリと書いてあるというたぐいのもので、言葉は決して筋の運びを教えない。何がどうしてどうなったかは絵で示され、言葉はその絵の補強、描写である。・・・〔雑誌『言語生活』昭和40年8月号「まんがの文体」による。

原文は縦書き。〕

また、同氏は、更に、

まんがは、まず擬声・擬態語がなければ成り立たないといってよいくらいこの種のことばにあふれている。擬声・擬態語に恵まれた日本語は、まんが家にとってまことに都合のよい存在であると同時に、また型はまりに実に簡単におちこむ原因にもなっている。〔雑誌『言語生活』昭和40年8月号「まんがの文体」による。原文は縦書き。〕

と述べている。

擬音語・擬態語は、漫画においてばかりでなく、一般の創作や詩などでも、人によっては、しばしば特異な、独特なものを数多く好んで使う人がある。たとえば、宮沢賢治氏の作品や、草野心平氏のかえるを主題とする詩などは特に有名である。

また、幼児語には、擬音語・擬態語に源を発した名詞や動詞が多く見られる。そうして、これらの中には、事物の正式名称として、あるいは、動作を表す口言葉として、大人の世界でも立派な日本語として通用しているものもある。

擬音語・擬態語は、象徴的なものであるから、普通の場合は、われわ

れ日本人としては、日本語の擬音語・擬態語は、たとえ、初めて接するようなものでも、それが、文脈の中で用いられている限り、特にその意味を説明されなくても、辞書などで調べなくても、いわば直感的に、あるいは、何とはなしに理解することができるものである。（「できるものである。」と言い切るのは、少し言い過ぎかもしれないが。）

たとえば、（以下の引用において、下線は筆者が施したもの。）

- お父さんが玄関にワラワラと走って行って……。〔家出しようとする母をとめる父のことを娘が述べた言葉。47.9.21 フジ テレビ放送：「凡児の娘をよろしく」〕
- たとえば、柔らかい肉はニク、柔和の柔はニュウ、軟球はナン……。というように、およそ音のことは、すべてニワニワした感じを含んでいる。おんなを女^にというの、その姿がニワニワとして、いとも柔らかいからである。〔『漢字まんだら』：藤堂明保・望月美佐著、読売新聞社 昭和47年3月30日発行 12ページ、原文は縦書き。〕
- 父はゴム足袋をぬいで上さあがりました……。父はだまつて、ずゝりずゝり音をたてゝおつけをすすつたり、たくあんを一べらのまま口に入れてぶりぶりかんだりして、飯をうまさうに食べてゐたが、……。〔『綴方読本』：鈴木三重吉著、中央公論社 昭和12年9月8日 21版発行 337ページ、茨城県水戸市の小学校児童の作品、原文は、縦書き、総ルビ。なお、「ずゝりずゝり、ぶりぶり」には、繰り返し符号が使っている。〕

などにおける下線を施した擬音語・擬態語は、少なくとも標準語としては、まず使われないものや、使い方が幾分ずれている感じがあるものであるが、読み手は、もちろん、文脈による補いや場面を思い描くことによる力も働いているが、どのような状態・様子であるか、どんな音であるかを、それほど考えることなしに、直ちに理解することができる。

ところが、日本語を学ぶ外国人にとっては、この擬音語・擬態語は必ずしも分かりやすい言葉でもなければ、自由に使える言葉でもないのである。これは、擬音語・擬態語が象徴的な言語記号である以上、むしろ当然のことというべきであろう。

外国人に日本語を教えていると、われわれが、何の気もなく読み過ぎていくこれら擬音語・擬態語の意味・使い方について、しばしば質問を受ける。教授者が生まれ落ちて以来、日本語の環境の中で育った者である限り、その教材の、その文脈の中で使われている擬音語・擬態語の意味を説明することや、他に幾つかの例文を示すことは、たいていの場合、それほど困難なことではない。しかしながら、意味の説明にしても、単にその文脈の中でだけ、あるいは、類似の文脈の中では、それで通るにしても、別の使い方——別の物音や状態・様子の説明としては、当てはまらなかったり、見当違いだったりすることもないではない。また、すべての擬音語・擬態語について、そのありとあらゆる異なった使い方の例をあげて説明することは無理であるにしても、ごく一般的に、標準語で普通に使われるものは、それぞれの例を示して説明することが望ましいわけであるが、教授者としても、時には、その使い方の一部を思い付かなかったり、うまい例文が思い浮かばなかったりする場合もある。

この辞典は、このようなことを、頭に描きながら編集に取りかかったのであるが、いろいろの理由で、はなはだ不完全なものになってしまった。これはもとより私自身の力が十分でないことが、その主な原因であろうが、用例を主として日刊新聞から収集することにしたため、思わぬ時間がかかり、終局は時間不足のため、このような形のものしかできなかった。なお、この辞典は、日本語を学ぶ外国人自身が、自ら参考として使用し、学習に役立てることも考慮したのであるが、この見地からいえば、用例は新聞のほかに、他の、この目的にふさわしい読み物からも求めたほうがよかったかもしれない。

すなわち、以上の目的に合うようなものとするには、その例文は、擬音語・擬態語の以外の部分は、ごく初歩的な、やさしい語句を使ったもので、その言い回しも素直であり、用字も、それ相応に考慮したものでなければならない。ところが、生きた実例としての新聞記事は、必ずしも、これらの条件を十分に満たしてくれてはいない。用字は、適宜改めるにしても、言葉や言い回しを変えるわけにはいかない。また、紙数の関係もあって、長文を引用することは、極力避けなければならないのであるが、短くては、われわれでさえも、その文の意味が——場面を思い

描くことがむずかしいので——びったりとのみ込めるところまでいかないうものもある。

では、その擬音語・擬態語を用いたびったりした、しかも、日本語の初歩の学習者である外国人にも分かりやすい例文を作って掲げたらよいだろうということになるが、この辞典に収めたすべての擬音語・擬態語について、上述の条件に合うような例文を作ることは非常に困難なことである。

以上のようなわけで、中には、やむを得ず不本意ながら自分で作った例文もわずか含めてあるが、今回はひとまずこのようなかたちで1冊の本にまとめることにしたのである。

以下、この論では、特別の場合を除いて、擬音語・擬態語は、原則として、片仮名とし、必要に応じて、ゴシック体の活字を用いる。なお、引用文の用字・用語は、縦書きのものを横書きにするほかは、原文のままとするが、擬音語・擬態語は必要に応じて、やはりゴシック体を用いる。

また、この辞典の本文では、擬音語・擬態語を、見出し語として平仮名で掲げ、用例中の該当語は、「〜」を用いることにした。

擬音語・擬態語とは何か

たとえば、「犬はワンワンとほえる。」「ねこがニャーニャーとなく。」「ひばりがピーチクさえずっている。」「ガチャンという音とともにガラスが割れた。」「ギーッという重苦しい音をたてて鉄のとびらが閉まる。」「カーン、快音を発して、みごとにホームラン……。」などにおける片仮名で書き表したもの（ただし、外来語を除く。）は、いずれも動物のなき声、あるいは、無生物が外力を受けて、壊れたり、擦れたり、打ち当たったりした時などに出る音響を、音声（ここでは、文字。）で表現したものである。このようなものを擬音語という。すなわち、擬音語とは、人間の笑い声、泣き声、つばを吐いたり、ものを飲んだり、平手でたたいたりする時などに発する音、人間以外の生物の発する声や音、また、自然界に自然に発する音響や、無生物が、いわば自然に、あるいは、外力の作用を受けて発する音響を、言声で表現した言葉である。この中には、むしろ「写音語」といったほうが適切なものも含まれている。

次に、たとえば、「高い煙突から真っ黒な煙がモクモクと出ている。」
「雪がチラチラ降ってきた。」「大きな目玉をグリグリさせて・・・。」「ス
ラリと背の高いお嬢さん。」などにおけるモクモク、チラチラ、グリグ
リ、スラリなどは、決して、煙が出る時に発する音、雪が降ってくる時
に生ずる音、目玉を動かすのに伴って出る音、ではないし、ましてや、
背が高いことによって出る音ではない。モクモクというのは、大量の煙
が勢いよく出ている状態を、チラチラというのは、雪の降り方が、それ
ほど大量でなく、勢いよくなく、舞い落ちていく程度の状態を、グリグ
リというのは、目を見開くようにして、視線を盛んに移動させている状
態を、スラリというのは、平均身長より高く、太り過ぎてみず、や
せ過ぎてみず、しかも、からだ全体の均せいがとれていて、形のよい
からだつきであるというほどの状態・様子を描写した言葉である。この
ようなものを擬態語という。すなわち、擬態語とは、われわれ人間を含
む生物、無生物、自然界の事物の有様・現象・変化・動き・成長などの
状態・様子を描写的・象徴的に音声で表現したものである。

擬音語と擬態語とは、このように音響を問題としてとらえるか、とら
えないかによって一応は区別してみることはできる。しかし、あらゆる
擬音語・擬態語が、常に、そのどちらであるかの区別がつくとは限らな
いし、また、人によって、同じものを、あるいは、擬音語としてとらえ、
あるいは、擬態語としてとらえることもある。また、同じ形でありながら、
擬音語としても使え、擬態語としても使えるものがある。

たとえば、

○ 給水制限のため、水道の水は、チョロチョロとしか出ない。
などの場合のチョロチョロは、水の出方が少なく、したがって、勢いも
弱い様子を表現したものであるとみてよいであろう。これを水が出るの
に伴って、あるいは、その水を容器などに受けている時などに出る音と
みるのは、絶対に不可能とまではいえないにしても、まず、普通に、す
なおに、解釈すれば前者の意味にとるべきであろう。したがって、この
場合は、擬態語であるといえる。しかし、

○ 登山道に沿って、小さな流れがあった。きれいな冷たい水が
チョロチョロ流れていた。

というような場合はどうであろうか。このチョロチョロは、水深がごく浅く、傾斜も緩やかで、水量が少なく、したがって、流れる勢いも強くないというような水の流れ方の様子を描写したものともとれるし、また、そのような流れ方をしている流れの発する音を表現したものとも解することができる。その流れのほとりに立って、目をつぶって、耳を澄ませば、その流れから発する音が聞こえる。その音を音声で表せば、ごく一般的にはチョロチョロと表現するであろう。

このチョロチョロは、

○ 鎮火後数時間たっているのに、まだ、あちこちでチョロチョロと赤い炎が見える。

○ 台所にねずみがチョロチョロしている。

などのような使い方もあり、この場合は、当然、擬態語である。

幾つかの擬音語・擬態語について、市販の国語辞典で、どう取り扱いされているかをみると次の通りである。

	広辞苑(第二版) 44.5.16 第1刷 (岩波)	新国語中辞典 42.1.1 第1刷 (三省堂)	例解国語辞典 31.3.25 第7版 (中教出版)	角川国語辞典 36.3.5 改訂初版 (角川)
ガブガブ	酒・水などを勢いよく音をたてて飲むさま。また、その音。		(体)①たくさんの液体を勢いよく飲む音・さま。②びったりしていないでゆるいさま。	①(副)酒や水を音をたてて勢いよく飲む-ようす(音)。②(形動ダ) (胃に)液体がいっぱいたまっている。
カンカン	①堅い物が触れあって発する音。②、③、④〔省略〕。	(副)①、②、③〔省略〕。	(体)①固い物が互に触れ合って出す音。②、③、④〔省略〕。	①(副)金石類の堅い音。②(形動ダ)ア、イ、ウ〔省略〕。
グウグウ	①いびきの音。②腹がへって腹や喉のなる音。	(副)①いびきの音。いびきをかいてよく眠っているさま。②空腹で腹やのどが鳴るさま。		(副)①熟睡しているときのようす。また、いびきの音。②空腹のときなど、腹の鳴るようす。

ゲラゲラ	大声でとめどなく笑う声。げたげた。	(副)しまりなく大声で笑うさま。		(感)しまりなく笑う声。
ゴクリ	液体を音を立てて一息に飲む音。ごっくり。	(副)のどで音を立てて液体を飲むさま。	(体)物を飲み込む音・さま。	
ザアザア	雨などの続けざまに降る音。また、水などが勢いよく流れたり落ちたりする音。	(副)水などが勢いよく流れる一音(さま)。雨が激しく降る一音(さま)。	(体)雨が激しく降る音。水が強い音を立てて流れ落ちるさま。じゃあじゃあ。	
バサバサ	物の乾ききったさま。また、髪などが乾いて乱れたさま。ぼさぼさ。	(副)①油けがなく、乱れたさま。②かわいた物が触れ合う音。	(体)①物が触れて立てる音。②髪の毛などの乱れたさま。	①(副)かわいたものが、ふれて発する音。②(形動)髪などが乱れたようす。

〔注〕(1) 斜線「/」は、見出し語として掲げてないことを示す。

(2) ①, ②, ③などは、必ずしもその辞書で用いている形そっくりそのままではなく、中には、漢数字の㊦, ㊧, ㊨を用いているものもある。

(3) 用例を添えてあるものもあるが、すべて省略した。

(4) 「カンカン」の欄で「省略」とあるのは、いずれも、「・・・のさま」または、「・・・のようす」とあって、擬態語として一致しているもので省略したものである。

この表で見ると、ガブガブは、『広辞苑』と『角川』では、「音をたてて飲む」ことを条件とし、その「さま(ようす)」、または、その「音」としているのに対し、『例解』では、「音をたて」ることを条件としていないが、その「音・さま」であって、いずれも、擬音語・擬態語とみている。

カンカンは、三つの辞書が、堅い物が触れ合った時などに出る音として、つまり、擬音語としてとらえ、次いで、擬態語として、太陽が強く照りつける様子、炭火などが勢いよくおこっている様子、激しく怒る様子などとして、すなわち、擬態語としての三つの意味を掲げている。しかし、『新国語中辞典』は、擬音語としては取り扱っていない。

また、ザアザアは、『広辞苑』は擬音語とし、『新国語中辞典』は擬音語・擬態語とし、『例解』では、「雨」の場合は、「激しく降る音」を表す擬音語とするとともに、「水」の場合は、「強い音を立てて流れ落ちる様子」を表す擬態語としている。

ゲラゲラになると、『広辞苑』と『角川』は「声」としており、ことに『角川』は、この語が「感動詞」であることを明示している。こうなると、もはや、擬音語・擬態語というわけにいかなくなる。しかし、『新国語中辞典』では擬態語としている。

このように、ある「擬音語・擬態語」が、「擬音語」であるのか、「擬態語」であるのか、はっきりと区別をつけにくいものも多くあるし、そのどちらにも使えるようなものもある。そこで、この辞典では、一括して「擬音語・擬態語」として取り扱うことにしたのである。

なお、この辞典では、本文の説明において、両方の使い方が実在するもの、および、そのように考えられるものは、なるべく「・・・音、また、その様子」などのようにしておいた。「音」、または、「様子」としてあって、擬音語か擬態語かのいずれか一方のようにしてあるものも、編者の考え不足であって、丹念に用例を収集すれば、あるいは、両方の使い方があるものがあるかもしれない。

さらに、この辞典では、「擬音語・擬態語」として見出しに立てたものも、先のゲラゲラのように、見方によっては、あるいは、感動詞として取り扱ったほうが妥当だと考えられるものが混入しているかもしれない。

これらの不備な点は、今後の検討にまつことにしたい。

擬音語・擬態語という呼び名について

この辞典では、前述のように、「擬音語・擬態語」という呼び名を使うことにした。擬音語は、また、「擬声語」という呼び名も広く行われており、むしろ、擬声語のほうが広く用いられているかもしれない。『国語学辞典』にも、事項索引には「擬音語」が掲げてあるが、見出し語としては、「擬声語」だけで、「擬音語」は見当たらない。

擬態語は、『国語学辞典』の見出し語にもあり、一般にもかなり広く

使われているが、これには「擬容語」という呼び名もかなり行われている。

そのほかにも、いろいろの呼び名があり、また、擬音語・擬態語をひとまとめにして、「象徴辞」とか「描写詞」とか名づけている人もある。なお、「擬声語」とは、広い意味では、「擬態語」をも含めた呼び名であり、狭い意味の「擬声語」であることを明らかにするために、「擬音語」という場合もある。

擬音語・擬態語の代表的な形ともいうべきガタガタ、コロコロ、パチパチ、ツルツルなどのように、2拍の要素が二つ重なった疊語の形式をとる場合は、

- ガタガタ揺れる車。
- ガタガタと揺れる車。
- ボールがコロコロ転がる。
- ボールがコロコロと転がる。
- 炭がパチパチはねる。
- パチパチと景気のよい音をたてて、たき火が燃える。
- 氷がはってツルツル滑る。
- ツルツルとよく滑る廊下。

などのように、「と」を伴わないでも、伴っても、共に、副詞として使われるが、ガタリ、コロリ、パチリ、ツルリなどや、ガタッ、コロッ、パチッ、ツルッなどは、「ガタリ（ガタッ）と揺れる。」「コロリ（コロッ）と転がる。」「パチリ（パチッ）と1枚写す。」「ツルリ（ツルッ）と滑べる。」などのように、「と」を伴って使うのが普通である。なかには、「ブラリ散歩に出かけた。」「ベロリ平らげる。」などのように使う場合もあるが、「ブラッ」、「ベロッ」の場合は、やはり、必ず「と」を伴って使う。更に、「ゾッ」、「ニッ」、「パッ」などの場合は、「思わずゾッとした。」「ニッと気味の悪い笑いを浮かべる。」「その瞬間、パッと明かりが消えた。」などのように、必ず「と」を伴って使われる。

擬音語・擬態語について述べた諸論文などでも、これらの場合は、必ず「と」を伴った形で示してあり、「(必ず)語末に『と』がつく。」などという説明がある。

しかし、この「と」は、やはり助詞とみるべきものであり、擬音・擬態の表現それ自体に含まれている切り離せないものであるとは、みないこともできると思う。このことについては、項を改めて述べるが、ここでは、「と」は、伴って使われるもの、添えられるものとして取り扱うことにしたい。すなわち、この本では、ガタガタ、ツルツルなどはもちろんのこと、ガタリ、コロリや、ガタッ、コロッやガタン、コロンや、また、ゾッ、ニッなどでも、片仮名で書き表した部分だけを、擬音語・擬態語として取り扱うことにしたい。もちろん、これは、単に便宜上そのようにしたのであって、文初・文中で、副詞として使う場合には、必ず「と」を伴っているものもあることはいうまでもないことである。

このようにしようとすると、「擬音語・擬態語」という名称は、あるいは、不適當であって、「象徴辞」とか「描写詞」とか、そのほか、たとえば「擬音表現・擬態表現」とか、あるいは、「擬音語・擬態語、および擬音語的・擬態語的語彙」とでもいうほうがよいかもしれない。けれども、世間一般で呼びならわされている通俗の言葉としては、私は、やはり、「擬音語・擬態語」であると思う。そこで、この辞典では、「擬音語・擬態語」の名称を採り、「擬音語・擬態語辞典」とすることにした。

「ゾッ」、「パッ」などの部分だけを取り出した理由

1 理由の第1

これらの擬音語・擬態語の表記がどのようなになっているかを、主として新聞についてみると、次の例のようである。

○・・・というから、生鮮

食料品の値段もピンとはね
上がりそうだ。〔読売新聞
(夕刊) 47.4.10〕

○・・・休日明けで各地か

らの貨物がドッとふえてい
るため、……。〔読売新聞(夕刊) 47.4.10〕

○ 本土の資本・商品ドッと殺到〔朝日新聞：見出し 48.5.15〕

○・・・のことをきかれると「相手(区割り委)に任せただ。

東日本のトップ切って
ワッと7000人

静岡県興津川

図1 〔朝日新聞 48.5.21 《あゆ解禁》〕

こっちがいえる問題じゃないよ」とムツとした顔。〔朝日新聞 48.5.11〕

- 昼すぎ、身のたけ三メートルもあるぬいぐるみのジャンボロボットがヌッとあらわれ、銀ブラ族を驚かせた。〔朝日新聞 48.7.16〕

これらの例、および、図1～図3で見られるように、ここでいう「擬音語・擬態語」の部分を片仮名で書き、「と」を平仮名で書き表している。もちろん、すべてが、こうなっているというわけではなく、〔以下、用例中のゴシック体は、筆者による。〕

本土の資本・商品トツと殺到

図2
〔朝日新聞 48・5・15〕

- 注意すると、指を口からはなし、タコのできた指をじっと見ています。〔朝日新聞：相談室の問い、子供の指しゃぶり 47.6.14〕

- ……と報道陣が質問を浴びせかけると、それまでのにこやかなスマイルはさっと消え、ややむつとした表情に。〔朝日新聞(夕刊) 48.7.12〕

などのように、「と」と共に平仮名書きの場合もある。

また、ブイ、ガタッ、ガタリ、ガタンなどのように、2拍・3拍のものも、次の例のように、おおむね「と」を伴って使われる場合が多い。



図3 〔朝日新聞(夕刊) 48.5.23 《ごみの処理》〕

- 報道関係者の質問がこのことにふれると「関係ないよ」。ブイと横を向いて不きげんになる。〔朝日新聞 48.5.9〕
- 大きな目玉、太いまゆ毛、ピンとはったひげづら。〔朝日新聞 48.7.16〕
- なに気なく、ボイと捨てる。〔朝日新聞 48.5.28〕
- ところで、スパイスはごく少量で味がガラッと変わるだけに